

カトリック仙台司教区

東日本大震災救援・復興活動ニュースレター

発行人：平賀徹夫 編集：小松史朗
 〒980-0014 仙台市青葉区本町1-2-12
 カトリック仙台司教区事務局
 Tel.022-222-7371 Fax022-222-7378
 1) 義援金振替口座：02260-9-2305
 名義：カトリック仙台司教区本部事務局
 2) 支援金振替口座：00170-5-95979
 名義：カリタスジャパン

仙台教区サポートセンター活動の一つの柱は、被災者への「こころのケア」です。各ベースでは既に「傾聴活動」を開始しています。

可能な場合は、ベースに「近隣住民が気軽に憩うことができる場」を提供し、そこにスタッフを配置しています。あるいは、仮設住宅の集会所に「出前」を行っています。そうした「場」で「憩い」を提供しながら「傾聴」活動を展開しています。こうした「こころのケア」についての取り組みをご報告いたします。

「移動カフェ」 in 宮古ベース



← 分かち合いバザーの様子

札幌を出発するボランティアたち →



仮設への「移動カフェ」を行っています。飲み物やお菓子等を持ち込み、集会所等で喫茶店をします。くつろいでいただき、お話をさせていただくという趣旨です。避難所から仮設住宅へ移り住んだ方々が孤独に陥ることのないよう、阪神淡路大震災の経験をもとに、宮古市社協が企画し、宮古ベースが請け負っています。各仮設住宅設置地区を1～3日単位で移動し、約2週間かけて巡回しています。各仮設の規模は、通常30～40世帯ですが、8月下旬に250世帯ある田老地区でも実施しました。

被災者とのふれあいという意味では「分かち合いマーケット」も有効でした。隣接する小百合幼稚園との共催で行った無料配布のバザーでした。宮古市民が、被災者が受けるだけでなく、できることを互いに分かち合おうという思いから「分かち合いマーケット」と命名されました。会場には募金箱も設置され、市民からの献金がよせられています。

ほっこりスペース「ふいりあ」と移動ふいりあ in 釜石ベース

被災直後から、聖堂1階のホールで支援物資の配布を行い、近くの避難所から被災者が通って下さいました。同じ場所に、4月末から、テーブルと椅子を置いて、訪れる方々にくつろいでいただけるようにしました。「静かなところに来ていい」と喜ばれ、いつの間にか、静かに過ごしたり、愚痴をこぼしあったり、交流の場所として地域に定着し、子どもたちも集まって来るようになりました。

コーヒー、お茶などの飲み物や、お菓子を提供し、静かに音楽を聴く人、みんなで手芸をする等、こころを癒す場所となっています。

このコーナーを「みんなのほっこりすぺーす『ふいりあ』PHILIA」と命名しました。ギリシャ語で「友情」という意味です。



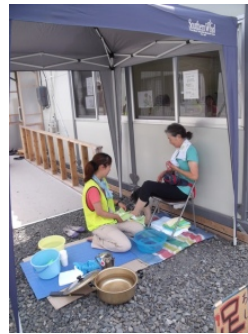
← タオルを使った「まけないゾウ」作り

「ふいりあ」にはキッズコーナー おじさんコーナーも



釜石では、仮設住宅へ出前形式で行く「移動ふいりあ」も成果を上げています。

主に、2つの仮設を重点的に担当して



ます。開始前に、個別訪問して移動カフェのお知らせをします。

三々五々集まってこられた方々に、例えば、足湯を提供しな

がらお話を聞く、体操をして体をほぐす、手作業をしながら話しをする等様々な形で取り組んでいます。



移動カフェ in 石巻ベース、米川ベース



↑ 石巻ベースから東松島町の仮設へ「移動カフェ」を展開しています。パルーンアートに喜ぶ子供たち、親子で楽しんでいただけました。将棋を楽しむ、おじいさんとお孫さんの姿も見られました。 →



米川ベースは、避難所であった志津川高校で長い間「カフェ」を行い傾聴活動を展開していました。避難所が閉鎖された現在では、南三陸町の仮設へ移動カフェを実施しています。野外でくつろぐ被災者と ↓



心のケア（傾聴）研修会 継続開催

サポートセンターでは、こうした傾聴活動に参加していただくボランティアの養成にも着手しています。傾聴ボランティア活動企画調整チームが「心のケア（傾聴）研修会」を実施しています。

初回は7月23日、元寺小路教会小聖堂で80人の参加者がありました。講師；赤井聖子さんによる「傾聴の基本的な心構えを知る～寄り添うことの意味」、釜石ベースで実践されている専門家；宇根節さんによる「釜石での取り組みから」の講話がありました。

8月20日、第2回目が開催され、赤井さんによる講義「自分を知る」、午後は宇根さんによるロール・プレイングという手法を使い、聞く側と話す側に分かれて実践的な演習を行いました。

参加者の一人は、「悲しい過去の体験、今なお続く悲しみや辛さを話したい話し手と向き合ったとき、そのあまりに重さに、聞き手は話を反らしたり話題を変えたりしたくなってしまう。「共に寄り添う」という作業は、その悲しみの中に一緒に留まるということなんだと、実際に肌で感じる事が出来たのは、大変貴重な経験でした」と感想を述べられています。

